

## 宝石命名法に対して

代々私たちの業界では、高品質のルビーとサファイアの色と品質を「ピジョンブラッド」と「ロイヤルブルー」という言葉を使い表現してきました。この言葉が表現するものは色だけでなく、同時にその石の優れた品質ゆえの希少価値を表現するために使用されました。とても主観的な表現なだけに、基準の合意に至っていないとしても、上質な色、品質そして希少性の三要素は欠かせられないはずでしょう。

ただし最近では、販売業者が、その宝石の販売促進を容易にするために、鑑別機関に上記の表現を用いた鑑別書の発行を依頼することがあります。第三者機関である鑑別機関の発行する鑑別書に上質な宝石の色を連想させる表現が記載されていると、消費者へ販売がし易いからです。それにより鑑別書の発行や鑑別の注文が増すのであれば、鑑別機関は当然のこととしてその傾向に従っていきます。業者にとって良い表記がされている鑑別書付きの宝石が販売し易く、そして鑑定機関は鑑別書発行量が増すとともに以前にまして売上と利益が向上する、この相互関係は業者と鑑別機関の両者にとって好都合な状況と捉えられるでしょう。

では一体、どの様な尺度や基準を持ってしてこの表現は生まれたのでしょうか？販売業者と鑑定機関の両者を含め我々業界全体は明確に答えられないでしょう。明確な答えが無いままに、我々は、非科学的で曖昧な昔からの言い伝えに基づき、各自の色と品質の物差しにあてながら様々な考えを巡らします。この物差しは、蛍光性の有無を品質の判断基準の一つとするような厳格な目盛りから単純に色合いだけを判断基準とする目盛りまでのとても長い物差しです。

この緩慢な状況下で起こる問題の源は、都合の良い言葉で宝石を表現することではなく、鑑別書上の表現方法（記載方法）の未標準化と相互理解の未調和だと思えます。鑑別機関は様々な尺度で「ピジョンブラッド」と「ロイヤルブルー」を鑑別します。幅広い尺度で鑑別された「ピジョンブラッド」と「ロイヤルブルー」は今や希少性を失っています。

実は最大の問題は、消費者が標準化された表現を用いた鑑別書を受け取ったと信じていることです。特に過去3年間に世界各国で発行された鑑別書は数え切れないほど多く、消費者が別々の鑑別機関から異なる意見を記載した鑑別書を受け取ることから起こりうる問題は避けようがありません。返品が一旦発生したら、この問題は大きくなる一方でしょう。

さて、このような状況は業界にとって好ましいのでしょうか？自由経済市場だからと言って、どの表現が正しいのか最終消費者の判断に委ねられるまで、現状維持のままで良いのでしょうか？それとも、我々業界人は業界保全のためにガイドラインを創出し、消費者からの我々の商品とサービスへの信頼を高めてゆくべきでしょうか？

つづく

2016年5月

一般社団法人日本宝石協会 副理事長

CIBJO（国際貴金属宝飾連盟） 宝石委員会部会長

ニーラム アラウディーン